田辺町埋蔵文化財調査報告書　第21集

京都府田辺町

宮ノ口2号墳発掘調査概報

1996

田辺町教育委員会

序

今回の報告は、本町南部の宮ノ口地区にある宮ノ口２号墳の調査の概要です。

この古墳は昭和48（1973）年、土取り中にみつかった横穴式石室墳で、昨年度調査を行った４号墳のすぐ西側にあるものです。

昨年の４号墳の調査と同様崖の上での調査でしたが、石室の石はすべて落下し何も残っていないという調査前の予想に反し、古墳の造られた時期を示すような遺物類や後世に再び利用された際の遺物がみつかるなど、大きな成果をあげることができました。

調査にあたりましては、地元宮ノ口区のみなさんをはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことを厚くお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解賜りますようお願い申しあげます。

平成８年３月

田辺町教育委員会
教育長　吉山　勝平

例　　言

1.本書は田辺町教育委員会が行った京都府綴喜郡田辺町大字宮津小字白山41番地に所在する宮ノ口2号墳発掘調査の概要報告である。
2.調査は平成7年度の国庫補助事業として実施した。
3.現地調査は平成7年12月11日に開始し、平成8年3月12日に終了した。
4.調査組織は以下のとおりである。

調査主体……田辺町教育委員会
調査責任者…田辺町教育委員会　教育長　吉山勝平
調査指導……京都府教育委員会
京都府立山城郷土資料館
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
田辺町文化財保護委員会
調査担当者…田辺町教育委員会　社会教育課　鷹野一太郎
同　上　中井　英策
調査事務局…田辺町教育委員会　教育次長　中川　勝之
同　参事　古川　章
同　社会教育課　課長　奥田　清
同　課長補佐　小西ケイ子
調査参加者…福田専一・細辻嘉門・石橋明子・小野香織・桐野佐紀・吉川正治・中尾隆志・木元　猛・木元正治

5.調査を実施するにあたり、白山神社（代表役員　中川　正）・宮ノ口区に多大のご協力を賜った。記して感謝の意とします。
6.調査期間中及び本書を作成するにあたっては次の方々よりご教示を賜った。記して感謝の意とします。（敬称略・順不同）
久保哲正（京都府立山城郷土資料館）、奥村清一郎（財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター）
7.本書の執筆は中井が行った。

目　　次

1．はじめに……1
2．位置と環境……2
3．調査の経過……2
4．遺構……3
5．遺物……6
6．まとめ……6

1．はじめに

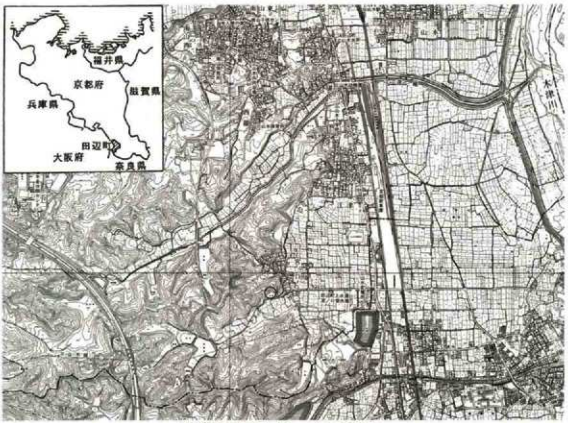
宮ノ口古墳群は京都府綴喜郡田辺町大字宮津小字白山41番地に所在する後期古墳群である。同地に所在する白山神社の裏山に古墳が存在するのは知られていた。

宮ノ口２号墳は昭和48年に白山神社西側の丘陵斜面を土取りと広場の拡張のために掘削していたところ、横穴式石室の石材と思われる石が露出して発見された。

通報を受けた町教育委員会は京都府教育委員会に連絡をとり、府教育委員会によって石室の確認がなされたが、遺物等の出土はなかったようである。平成５年度には、宮ノ口２号墳が発見された崖の法面を修正する工事がきっかけで宮ノ口４号墳が発見され、その後町教育委員会は府教育委員会との協議の結果、国庫補助事業として発掘調査を行った。

宮ノ口２号墳は、平成６年度の宮ノ口４号墳の測量調査の際に墳丘が半分程度残存していることがわかり、かつ、崩落による消滅の危機にさらされていることがわかったために府教育委員会との協議の結果、平成７年度国庫補助事業として発掘調査を行うことになった。

なお、土地所有者である白山神社をはじめ、作業に従事された宮ノ口区の皆さん、学生諸氏、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとする。



調査地位置図（S＝1：20,000）

2．位置と環境

田辺町は、京都と奈良を結ぶ道筋のほぼ中間にあたり、その面積のほとんどが生駒山地に連なる京阪奈丘陵の東斜面になり、東端は木津川に至る。地形は南山城を北流する木津川にそそぎ込む小河川が開析した開析谷及び扇状地、木津川による沖積地によって形成され、小河川はほとんどが天井川化して独特の景観を呈している。木津川による沖積地は、そのほとんどが低湿地であり、木津川の氾濫により影響をうけるため、山に沿った、解析谷・扇状地が集落形成の土台となっている。

田辺町の文化の特色は、普遍的にその所在に依るものが多く、京都・奈良・河内の文化が時代ごとに、それぞれ勢力の強弱によって、田辺地域に色濃く影響を与えている点である。

3．調査の経過

現地は白山神社の所有である。本来、雑木林、桧の植林であるが、近年、竹の侵入が目に付き、ほぼ竹林になりつつある。

調査着手前に、古墳周辺の伐採はほぼ終了していたために、まずトレンチの設定を行い、それにあわせ追加の伐採を行った。

設定には平成6年度宮ノ口4号墳の調査に使用した4ｍメッシュをそのまま利用して地区割りをした。

墳丘トレンチ

古墳北側は、見かけ上極めて狭い平坦面の後、緩やかな傾斜度で尾根上に続き、東西には墳丘を頂点として、西側は現状で急に落ち込み、東側は緩やかに2号墳へ下がる。トレンチは、当初の目的が古墳の規模、及び範囲の確認を主な目的としていたため、墳丘の頂点を基点とするＬ字型に幅1.5m程度の溝掘を行い、古墳の裾部の検出につとめた。

掘削は人力で行った。表土を剥いだ後に、トレンチを断ち割り気味に掘削した。墳丘上部の既掘壙部ではすぐに地山が露出したが、北側平坦面直下では、黄灰色土が厚く堆積していることが判明した。この部位は墳丘を周囲から切り放すための周溝の部分に相当する。この切り離し溝は、ほぼレベルを保ったまま東側に回り込み、東西方向トレンチでもこの溝の延長と思われる溝を検出した。

東西方向トレンチでは、盛土の状態を見ながら掘り下げたもののすぐに地山につきあたり、墳丘も地山直上の層を残し、ほぼ流失しているのが判明した。また、地山直上の層には炭を多く含む土壙状の窪みを検出した。

作業風景（東から）

石室トレンチ

石室の状況は発見された当初の状況と現況から、石室に使用された石材はすべて転落しているものと予想していた。しかし、石室の石材抜き取り跡で掘方の規模を把握しようとしたところ、転落せずに残っている石材があることが判明し、石室規模を調査するためのトレンチを急遽拡張した。

石室トレンチでは、石材の抜き取りによるものか、地山が擂り鉢状に落ち込んでいく状況が検出された。また、石室・石材抜き取りの掘方が平面で確認できた。さらに、掘方内部の土層状況から、石材はかなり徹底的に動かされて、抜き取られており、残存している石材もほとんど現位置をとどめていないことが判明した。

撹乱された土の下層部には、須恵器の破片が混じる。

床面もほとんど残っていなかったが、撹乱を免れたと思われる土器（須恵器・瓦器椀）が西壁に沿って並び置かれた状態を検出した。

4．遺構

墳丘

一般的に墳丘に利用する土は古墳の周囲を溝状に掘削し、その際の排土を盛り上げる方法をとる。また、尾根などの自然地形を利用して古墳を築造する場合、形を整えるために地形の一部に手を加えることがほとんどである。宮ノ口２号墳は緩やかな斜面に立地する

石室内の状況（北から）

ために、前者の方法を取り入れて作られたものと考えられる。

斜面に、直接古墳の基底部を描きＶ字型の溝を掘りながら排土を積み上げて古墳を構築していったと考えるのが妥当であろう。

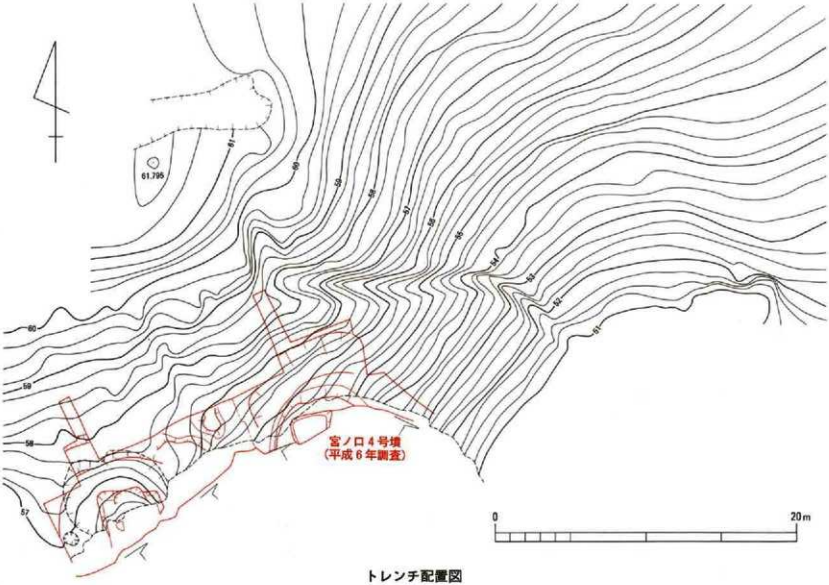
残存している墳丘は崖の崩落によりほぼ半分が失われている。残っている部分も盛土の流失が著しいが、その形を直径約18mの円墳とすることができよう。

２号墳は、斜面に直交する方向にややつぶれた楕円形が復元できるが、設計が斜面上に描かれた正円であるならば、その理由を説明できる。

石室

石室は昭和48年の発見時に石材をほとんど崖下に落とされている。このような状況から、石室は徹底的に破壊されている。というのが当初の予想であったが、石材の抜き取り跡を清掃していると、一部石材が残っていることが判明した。壁面の分層及び、地山の追求から石室掘方の幅は約４ｍで、深さは約2.5mであることがわかった。掘方内部に流入している土は、粘土と砂質土との互層で、裏ごめ土の様相を呈していたが、掘り進めるにしたがってこれらは石が抜かれた跡の空間に徐々に水と一緒に堆積していったらしいことがわかった。これらの、流入土を除去するに従い、掘方内部に軸が異なる方形の掘方が現れ、この方形の掘方が抜き取り跡らしいことが判明した。

方形の既掘壙は黄褐色土で覆われているが、下部には先に述べた粘質土と砂質土の互層が混じる。遺物は砂質の部分から多く採集された。残存する石材はこの既掘壙の最下部に



トレンチ配置図

位置する。

石材の裏ごめの土は、灰白色の砂質土で一部粘質土が混じる。版築等の作業は認められない。かろうじて現位置をとどめる石材は2個であった。床面直上では一部、火を受けたような層があり、炭の細片が混じる。土色も灰が混じったような感触をうけた。

石室床面（東から）

5．遺物

見つかった遺物は、現位置をとどめていた遺物以外はすべて破片である。表土直下から陶棺破片が2点見つかったが、2号墳の石室に納められていたものとは考えにくく、2号墳・4号墳に続く古墳の存在をうかがわせる。撹乱された土の中からは須恵器の杯身・杯蓋、高杯・蓋が出土し、床面に近い層からは須恵器片、鉄器、床面からは、須恵器杯、瓦器、鉄器が出土した。

6．まとめ

現況から石室の遺存はないものと予想していたが、調査の進展につれ、遺物も採集でき、撹乱がひどいものの石室についての情報もより多く得ることができた。今回の発掘調査によって遺物を採集することができ、古墳の正確な時代を知り得たことは大きな成果だろう。

古墳の築造年代は、須恵器の年代から、4号墳とほぼおなじか早い、7世紀初頭に求められ、さらに検討中ではあるが須恵器と瓦器が同一面に並んで検出されたことから、瓦器の年代に古墳の再利用がされていたことが推測できよう。

墳丘の規模については周溝から約18mであることがわかった。高さについては不明である。

宮ノ口2号墳は4号墳よりもひとまわり大きく、時期も同時期かやや先行するらしいことが判明しつつある。さらに、石室の再利用がどのような性格のものかは、慎重な検討を要する。また、4号墳の調査時に出土した陶棺が2号墳のものではないらしいことは、さらに他の古墳の存在を示唆するものである。

平成8年3月28日　印刷
平成8年3月29日　発行

宮ノ口2号墳発掘調査概報
（田辺町埋蔵文化財調査報告書第21集）

編集・発行　田辺町教育委員会
〒610－03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字田辺80番地
電話　0774－62－9550

印　　刷　明新印刷株式会社
〒630 奈良市南京終町3丁目464番地
電話　0742－63－0661